実践型地域研究ニューズレターno.41，2012 年 3 月

ざいちのち

まちやむら、そこに住む人びと（ざいち）の、
知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

京都大学
学際融合教育研究推進センター　生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

ミャンマー・イラワジ川
夕日とデルタ

朽木フィールドステーション

在所におけるつきあい方から教わったこと

朽木 FS　　増田 和也

近年、地縁や血縁などをもとにした人々のつながりが希薄化していることが指摘されるなかで、人と人の共同性をあらたに作り出そうという動きがある。ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の利用者が拡大しているのも、多くの人が人と人の関係を新しいかたちで創出・再構築することを求めているからなのであろう。そこでは、何らかの共通点・接点にもとづいた緩やかなまとまりがベースになっているように思われる。一方、私は別のことをきっかけとして、人と人を「つなぐ」ということを改めて考える機会があった。

これまで私は、FS 活動をつうじて滋賀県長浜市余呉の摺墨（するすみ）集落へ通ってきた。つきあいのなかでは、忘年会などと称して在所（集落）の方々と飲食をともにする機会がある。そうした折には、FS メンバーに加えて、私の友人などにも声をかけ、少しでも場が賑やかになるようにしている。

2009 年 11 月、私は摺墨での忘年会開催にむけて日程を調整していた。摺墨には滋賀県立大学の研究施設があり、そこに関わる教官や学生も在所の方々と懇親の場を企画されようとしていた。FS メンバーには県大関係者がいることもあり、在所との忘年会を一緒にしてはどうか、という案が挙がった。私は、程度の差はあれ、皆、摺墨に何らかの接点がある上に、在所・県大・FS という 3 者が一同に会する場は初めてであり、何か新しい展開が生まれるかもしれないと思い、この提案に賛成した。

忘年会の合同開催を在所の方に打診すると、思いもしないことを尋ねられた。「そうなると会の主催は誰で、趣旨は何ですか」。私が経緯を説明すると、相手は納得してくださったものの、県大側の代表者からも区長（在所の自治会長）に挨拶を入れるようにいわれた。私は、なぜそこまで必要なのかよくわからなかったが、そのようにした。県大の先生もきちんと対応してくださり、忘年会は和やかに開催することができた。

2011 年末、摺墨でお世話になっている 3 人組との雑談のなかで、ふたたび忘年会をしようということになった。そこで、焼畑のことでお世話になっている永井さんもお誘いした。すると、このとき永井さんが尋ねられたのも「主催者は誰か」「会の趣旨は何か」ということであった。そして、一昨年の忘年会のことを思い浮かべられたのか、県大のことに言及された。私が今回は県大とは別であることを口にすると、次のようなことをおっしゃった。「私はすでに隠居した身なので、オオヤケの場になると少々出にくいのです」。つまり、県大との会は在所全体で対応すべき公的なもの、すなわちオオヤケの領域のものであり、これには各イエに声をかけ、各イエの主人が顔を出すことになる。そのため、隠居された方はこうした場に堂々と顔を出すことは躊躇される。一方、私という個人が主催する場は「ワタクシ」のものであり、これには永井さんも参加されやすい。そういうことなのであろう。

このように、在所の方々は人々の営みや関わりを「オオヤケ」と「ワタクシ」の二つの領域に大きく分けている。そして、対象となる事柄がどちらの領域のものかによって、自らの適切な関わり方を判断されるようなのである。そのために在所の方々は、忘年会を企画する度に趣旨や主催者を尋ねられたのであろう。それまで私は、摺墨という在所に関わる人々が集う、緩やかなまとまりの場として忘年会をとらえていたが、在所の方にとって、県大と我々FS メンバーとでは位置づけが異なっていた。もし私が 3 者をつなごうとするのであれば、それなりの道筋をつくることが望ましかったのである。

在所には人とのつきあいのわきまえや節度があり、それぞれの場にふさわしい関わり方がある。日常的に顔を合わせる関係だからこそ、そのような作法が大切となるのであろう。緩やかなまとまりに慣れていた私にとって、忘れてはいけないことを改めて教わった気がする。

地域の伝統技術の新しい価値を考える

亀岡 FS　河原林洋

現在、亀岡市京町にある片井鉄工所において、京都学園大学歴史民俗学専攻（以下、学園大）の手塚恵子准教授と学生により結成された鍛冶屋倶楽部による、鍛冶・片井操氏の鍛冶技術の調査と映像記録が行われている[1]。

手塚准教授によると４つのテーマ[2]に沿って調査を進めているそうだ。(1) 片井鉄工所・旧別院工場に保存されていた農具の調査。(2) 亀岡市におけるかつての野鍛冶の調査。(3) 片井氏の野鍛冶の道具の調査。(4) 農具の製作過程の記録と映像記録。

これらは、データベース化されて、亀岡市や亀岡市文化資料館に寄贈されることになっている。また、今秋、亀岡市文化資料館において、道具類や鍛冶についての展示会が行われる予定である。この調査研究に加え、鍛冶屋倶楽部は、近隣の農家から譲り受けた鉈などの道具類の静態保存[3]とともに、それらの道具類を使う技術や修理する技術を継承するため動態保存[4]にも取り組もうとしている。

写真 1　鍛冶屋倶楽部の活動の様子
2012 年 2 月 16 日

さる 2 月 16 日、私が片井鉄工所を訪れた際、鍛冶屋倶楽部が、農具の調査や製作過程の映像を撮りながら、鍬製作を手伝い、鍛冶技術を習得しようとしていた。鍛冶の基本技術の習得には、約 10 年以上を要し、修行に終わりはないと片井氏が言うように、伝統技術の継承は容易いことではない。しかし、技術を継承しようという意識と実践は重要なことではないだろうか。また、私は、その意識と実践に別の意義を見出している。それは、伝統技術に新たな価値を見出し、既存の価値と融合させようとしていることである。

私は、保津川筏復活プロジェクトを通じて、保津川の筏流しの既存の価値＝人や物を運ぶ手段に、新しい価値観＝保津川の歴史的環境[5]と地域住民とをつなぐ手段を融合させ、地域の諸問題を克服し、新たな歴史的環境を創出することを考えている。この図式は、鍛冶屋倶楽部の活動にも当てはまるであろう。その活動は、鍛冶の既存の価値＝道具類を作成する手段に、新たな価値＝亀岡の歴史的環境と地域住民をつなぐ手段を融合させ、地域の伝統産業喪失の問題を克服しながら、新たな歴史的環境を創出しようとしている。

鍛冶屋倶楽部の活動を通じて、他の学生や地域住民が、片井鉄工所に集うようになり、鍛冶体験をしながら、伝統技術を学び、片井氏との対話の中から、鍛冶屋倶楽部の言うところの「鉄」学[6]を学んでいる。今、鍛冶場が、学びと地域交流の場という新しい価値観をもって生まれ変わろうとしている。

[1]亀岡市と京都学園大学による官学共同研究事業「戦後の亀岡市における鍛冶屋の歴史民俗学的調査」
[2]４つのテーマは、手塚准教授の聞き取りから筆者が作成した。
[3]機械類が、本来の用途としての動作・運用が可能でない状態で保存されていること。（フリー百科事典「ウィキペディア」2012 年 2 月 28 日参照 ）
[4]実用されなくなった機械類を、操作や運用が可能な状態で保存しておくこと。（goo 辞書 2012 年 2 月 28 日参照 ）
[5]歴史的環境とは、地域において、景観、風俗、習慣、様式、技術、価値観など、継承・発展してきたものの総称として使用する。地域住民のアイデンティティとも言えるであろう。
[6]鍛冶屋倶楽部 HP を参照。
http://kajiyaclub.blog69.fc2.com/

「都市の論理、地域の感覚」

NPO 法人五環生活　研究員　近藤　紀章

今、自転車を活かした地域づくりに関わる機会が多い。ここ守山でも関わっている。

守山は南北に約 10km、東西に約 6km の範囲に、高低差が約 20m と平坦な地形が広がっている。バスの利用状況と自転車の利用状況が比例しているが、中長距離の移動は圧倒的に自家用車が多い。さらに、自転車利用の特徴は、その多くが近所のちょっとした買い物に使っていることにある。また、学校が多いこともあって、学生のマナーの悪さが指摘されている。

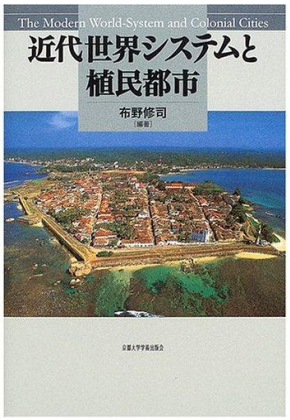
そして、オランダのグローニンゲンやデンマークのコペンハーゲンなどのように、自転車にやさしい都市をめざそう、というものである。

こういう話を聞きながら、いつも不思議に思うのは、自転車や交通の地域づくりのお手本として紹介されるのは、決まってヨーロッパである。なぜ、中国や東南アジア、インドはお手本になりえないのだろうか。

おそらく、都市というものの根源的な部分があまり理解されていないことが理由の一つにあると勝手に考えている。同時に、中国や東南アジアで車道を走る自転車を見ると、学生のマナーが悪いだけではなく、負けない身体的感覚を見直す時期がいずれ来ると思う。

話を本題に戻すと、この守山で、3 月 9 日（金）に、布野修司先生を迎えて、第二回地域づくりフォーラムを開催する。

植民都市論という地域のとらえ方



若かりし頃、ムラがまちとなり、まちが都市になっていく、そんな進化論的なイメージを持っていた。しかし、すべての都市は植え付けられた都市であるというのだ。名前負けが証明しているように、建築や都市に興味もあり、工学系のはしにいた、私にとっては衝撃的なキーワードだった。同時に、二つのことを考えさせられ続けている。

一つは、私もどちらかというと計画論者であるが、完成した後に興味があり、どう使われていくのか、続けていくのか、そのしくみとしかけが気になっている。しかし、特に建築などの設計では、ロードマップを作りあげるまでは、関わりのエネルギーやモチベーションは高いが、完成をみてしまうと、どうしてもトーンダウンをしてしまう、らしい。計画とは一体、何なのだろうか。

もう一つは、まちづくりや地域づくりの場面で、「よそもの、ばかもの、若者」が地域活性化のキーワードだと言う。役割分担と言ってしまえば、そこまでだが、私はこの考え方に否定的である。その理由は、個人を抽象化することによって、主体性（この場合は責任と言い換えても良い）を希薄化させることで、権力構造を生み出しているからである。

これらの疑問の根底には、都市機能を植え付ける、植民都市論の影響があると考えている。

今回、布野先生からは、「カンポン kampung とは、インドネシア（マレーシア）語で「ムラ」という意味である。カンポンガンというと「イナカモン」というニュアンスである。都市の居住地なのにカンポンという。そして、このカンポン、実は、英語のコンパウンド compound（囲い地）の語源という説がある。カンポンの世界に学びながら、アジアの都市の共生原理を考えたい。そして東北復興、日本（地域）再生について議論したい」という趣旨で講演いただくことになっている。

前回のフォーラムの最後で、都市に住みすべてが異郷である世界像と、一方で逃れられない人々が住む世界像があり、そこをすりあわせる必要がある、という問いかけが残されている。布野先生の語りを通じて、この問いかけの核心に少しでも近づきたいと思う。

催しのご案内

■ 44 回 定例研究会

1. 日時：平成 24 年 3 月 30 日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山 FS（滋賀県守山市梅田町 12-32）
3. 京滋 FS 事業のまとめと今後の活動について

■京滋フィールドステーション事業　最終報告会

1. 日時：平成 24 年 3 月 24 日（土）10:00～17:00
2. 場所：守山駅前コミュニティーホール　第一ホール
（JR 守山駅西口 「セルバ守山」３階）
3. 京滋 FS 事業　守山･朽木･亀岡各 FS 及び海外活動成果の報告
（FSの活動協力者の方々がコメンテーターとして参加されます。）

＊以上の催し物への参加御希望の方は、
京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当:矢嶋　yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp　）までご連絡ください。

「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」の成果報告の要旨

東南アジア研究所　安藤和雄

「地域とは何か」を分析的に描き出すことを目的とした一般的な地域研究と実践型地域研究が異なる点は、あくまで実践を通じて地域を理解し、地域が理解されることで実践が促進されるという関係が成立していることにある。実践は問題を克服し何かをつくりだすための行為でもある。私たちは京滋FS事業の課題として地域社会の再生モデル構築を設定した。「その土地で暮らしていこう、生きていこうという覚悟や自覚をもった人々が助け合い、ネットワークをつくりながら暮らす土地」が在地であると私たちは考えた。人々の暮らしの持続性には地域が在地となることが不可欠である。地域に暮らす人、地域にかかわる人、すべての人に「在地の自覚」が芽生え、それを具体化していくことこそが生存基盤を整備する条件となる。日本の農村開発の取組は経済問題やインフラ整備を優先するあまり、「在地の自覚」の重要性に気づいてこなかった。過疎問題の背景にはこのことが存在すると私たちは考えている。そして生存基盤を文化の問題として捉え直し、それを拠り所として地域社会の再生モデル構築に取り組んだ。

守山市、高島市(朽木)、亀岡市にそれぞれフィールドステーション(FS)を開設し、各FSにおいて2～3名の研究員が中心となって実践型地域研究を展開した。地元のNPO、自治会、地方行政と協働活動を展開し実践者(亀岡FSでは保津川遊船の船頭2名、朽木では農家1名)にも研究員としてプロジェクトに参加してもらった。本研究は、研究者には実践の場を、実践者には研究の場を提供した。組織活動と研究員活動の両面で積極的に実践と研究の統合化をはかった。各FSの課題は、守山FSでは、街(まち)と在地(むら)の具体的な連携による地域住民の自主的活動である固有文化の掘り起し運動と地方行政との連携(美しい湖国・もやいネット、美崎自治会大川活用プロジェクト、守山市との学術協定締結)、朽木FSでは持続的な生業システムの実践的検証の萌芽(火野山ひろばによる焼畑などによる里山と里地の循環的再生の試験的展開)、亀岡FSでは、暮らし・コミュニティと環境と伝統文化の再生による地域おこし(プロジェクト保津川、京筏組、保津町自治会)を次の方法で実施した。**方法1)**実践活動への主体的参加と在地の知恵、在地の技術の記録と復元の取組、**方法2)**守山FSにおける「寄合の場」と月例研究会実施、プロジェクト事務局によるニューズレターの発行、**方法3)**筏ながし、すいたん農園、だるま蕎麦、焼畑、大川活性事業などのイベントによる地域再生事業の立ち上げと住民参加による事業の継続的実施、**方法4)** 外国人研究者、実践家を招いての研究会、意見交換会、である。

地域再生の事業モデルは、地域によって具体的に異なる。したがって、各FSの研究員が4年間取り組んできたプロセスそのものが地域再生のモデルとなるだろう。それを京滋FS方式と呼びたい。

その内容は、**①直観の重視**：地元で実践者の研究参加、**②視点の転換**：研究者の実践参加、**③主観と客観の統合**：定期研究会の持続的開催、**④新しい文化の創出**：地元住民の参加によるイベントの継続開催、**⑤研究成果の地元還元**：ニューズレターの継続発行とフォーラムなどの協働開催、**⑥新発想の注入**：地元以外の人々(外国人を含む)との意見交換、**⑦経験(主観)の主体化**：研究員各自がファシリテーターとなり実践型地域研究の方法論的完成、**⑧事業モデルの確信的展開**、である。現在準備されつつある本プロジェクトの各FSの研究員の「論文」が掲載される最終報告書に事業モデルの具体例が記載されるが、参考のために亀岡FSの「筏ながし地域再生事業」の事例をあげておきたい。

プロジェクト保津川には、保津川の環境美化を目的として人々が集まった。そこには保津川遊船の若い船頭さんたちが何人も加わっている。そして保津川開削400年記念行事で筏ながしの歴史に光があたり、現在、保津川を生業の糧としている船頭さんたちの「船頭という実践者だけが持ちうる主観の中に潜む直観」を動かすことになる。それが契機となり筏ながしの経験者から具体的な方法の掘り起こし、筏流しの実験、鍛冶屋での釘などの復元が行われて、ネットワークがひろがった。今では、筏流しによって形成されていた河川と里山のネットワークを土台にして、筏流しのイベントを市民参加型の地域再生事業として成長させるにいたっている。

以上が、2012年2月28、29日に宇治キャンパスで開催された生存基盤科学研究ユニットの成果報告会で発表した私たちの活動の要旨である。私たちの活動は一区切りつくが今後とも各FSは継続される。

地元の方々、NPO、自治会、地方行政、大学関係者などの関係各位の4年間のご協力への感謝とともに、今後のご支援をあらためてお願い致します。

発行：〒606-8501　京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/
編集：矢嶋吉司・荒木一子